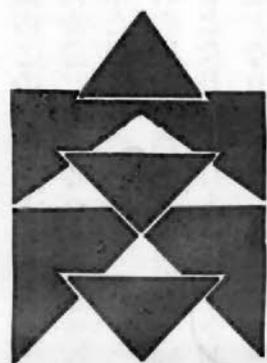


1981



高崎高校同窓会報

発行所
高崎高校同窓会
〒370
高崎市八千代町
2-4-1
TEL
0273-24-0074

第15号 昭和56年12月15日



わが高高のこの一年をふりかえって見ますと、何か急に爽やかな新鮮な風が吹きこんで来た感じが致します。

本年一月の同窓会総会は、第五〇回の人達が中心となり、三百人を越す空前の盛んな総会となりました。来年の企画運営は五一回へと、壇上で大きな鍵が渡されました。出席者も若い人が多く、明るく楽しい、同窓会の前途を思わせられます。更に、一月三十一日には、待ちに待った、母校創立八十四年目にしての、全国選抜高校野球大会出場が決定致しました。始めて甲子園の土を踏むことになりましたが、この為に各位各層の熱情溢れる募金運動により、僅か二月に足りぬまでに、一億円を越えることとなりました。皆様の御熱意に心から感謝申し上げます。一回戦で敗れましたが、実力は紙一重であり、何より野球部創設以来初めての全国大会出場の意義の重さを感じます。余りました大切な金は、厳しく管理され、野球部や各部を通ずる運営の基金として使われております。

野球以外のスポーツに於ても、夫々全国にその実力を認められる成果をあげつつあり、大学進学に於ても、東大始め各大学入学の率は、群馬県下に於て他を圧する様になりました。この事は学校の目

新風

原 一雄

烏兔匆匆



高橋 邦雄

われわれが旧制高崎中学に入学したのは、関東大震災の翌年の大正十三年で、卒業は昭和四年である。記録によると入学者一四八名、卒業生一一六名とある。三年生のとき昭和と改元された。われわれが在学した五年間は、振り返ってみると、戦争前夜を思わせるような時代だった。昭和二年（一九二七）には金融恐慌が起きて経済が大混乱に陥り、社会不安が増大した。翌三年には張作霖の爆死事件、第三次山東出兵等があつて、中国との関係がますます険悪化しつつあつた。わが国は、知らず識らずのうちに、破局への道を歩みはじめていたのである。しかし、このような事態を誰も察知する者はなかつた。今と比べるとすべて、貧しく、不自由だったが、結構伸び伸びと学園生活を楽しむことができた。学校への行き帰りにいふん悪戯もしたが、別に咎められることもなかつた。今にして思えば、まずは良き時代だったといわねばならない。

学校では毎年一、二度各方面の知名人、

識者を招いて、講演会が開かれた。われわれが二年か三年生のときだったと思うが、催眠術の講演があつた。一通り説明のあと、いよいよ実験ということになり、一人の生徒が壇上に呼び上げられた。さあどうなることかとわれわれは固唾を呑んで見守つたが、その生徒は見事催眠術にかかり、実験は成功した。ほっとすると同時に不思議に思つたことを覚えていた。また、何年生のときだったか忘れたが、世界探険家と称する人が呼ばれ、外国の珍しい話や冒険談をきかせてくれた、われわれは胸をわくわくさせながら、そのスリルに満ちた話にきき入つたが、あとでその男は外国旅行など一度もしたことがないのだときかされて驚いた。一杯食わされたわけである。しかし、こういう妙な講演ばかりきいていたわけではない。加藤咄堂や高島米峰といった人たちの講演は、われわれに深い感銘を与えた。殊に加藤氏は非常な雄弁家で「世の中は持ちつ持たれつ。諸君は勉学、修養に努め、社会に貢献する有用の材とならなければならぬ」と説き、以後、生徒の間に「持ちつ持たれつ」という言葉が大流行した。半世紀余も前の話である。

毎年新学期のはじめにクラスの編成替えが行われた。その結果、ほとんどの者が一度は机を並べるようになった。従つてわれわれは、今でも級友の誰彼の青年の日の姿を思い浮かべることができ、そのクラスメイトも次第に欠けていって、今では七〇人になってしまった。まことに烏兔匆匆、今昔の感なきを得ない。

(二八回)

银杏並木に

思う



横山 巖

この秋、びわこ国体出場選手を激励するため、高崎市内の高等学校を歴訪した。高々のテニスコートでは、軟式庭球の出場選手が国体を旬日後に控えて気合いかかった練習をしていた。また、校庭一杯に、この春の選抜高校野球大会で開校以来の念願であつた甲子園出場を果たした野球部や、伝統もあり今後の活躍が期待されるラグビー部などの練習が展開されていった。

明るい秋の陽ざしに映える白いユニフォーム姿が、ことのほか新鮮に感じられたり、元氣いっぱい若い若人の躍動が、いかにも健康的で力強く心に響いて、熱いものがこみ上げて来る程の感動を覚えた。今回の学校訪問で、監督の先生方が選手と一心同体になつて、打ち込んでいる姿、選手諸君の練習一筋の精進ぶりに接して、大いに教えられるところがあつて、改めて心から「苦勞様です」と申し上げたい心境である。母校の校舎も校庭もすっかり整備され

高 高 の 同窓会長

さす文武両道達成の成果でありまして、同慶の至りに堪えません。

また学校全体を通ずる校風も、戦後の混乱を経て漸く肅然たる落着きを取戻し卒業式に於ては、国家民族の象徴である国旗が校旗と共に掲げられ、国歌が歌われる様になりました。国旗国歌を大切にすることは、洋の東西を問わず、イデオロギー以前の問題であり、国家民族の存在する限り、当然の事でありませぬ。

同窓会の実行運営につきましては、校内幹事と共に同窓会自身から本部幹事を選び、既に理事会常任理事会の決定する案の実行に当っております。来年は五年に一回の会員名簿を作製致しますが、何分大冊であり、新しい企画により進められておりますが、皆様の御協力をお願い申し上げます。

この同窓会報も、充実した内容を盛り新装によって一万三千の会員に送られる事になっております。会員の皆様は、年一回の母校の活動を知る良い機会でも御座居ますので、御熟読をお願い致しますと共に、年会費のお払込みにもよろしく御協力の程をお願い申し上げます。

会員の皆様、全く面目を一新致しました母校を、時に訪れられ何かとお励まし下さいます様お願い申し上げます。

面目を一新した中で、銀杏並木は昔の面影を残して、私たちの遠い思い出をつないでくれている。

この銀杏並木は、昭和十三年十二月、当時の高が上和田校舎から現在地に移転する際移植されたものであると聞いている。当時私は五年生で、自分の机と椅子を両肩にかついで移動した一員であるので、銀杏並木とは「移転同期生」で浅からぬ縁があるわけである。移転後はじめての卒業式（昭和十四年三月第二十八回）は、講堂が未完成のため「生徒控室」で挙行された。そして私たちは、移転後間もない銀杏並木の道を通って母校を後にしたのである。

その後四十有余年が経過した。母校の銀杏並木は、年々歳々卒業生を送り、新入生を迎えた。毎日毎日繰り広げられる学校の営みや若人の青春の哀歓をじつと黙って見つめ続けてきている。それだけに、この学舎に学んだ者にとって銀杏並木は忘れ得ぬ思い出の種になっているのだ。

そのような心情から私は学友に頼んで母校の銀杏並木を画いてもらった。その油絵がわが家の狭い応接間にかかっている。早春の淡いタッチの小品であるが、いつまでも母校と青春の思い出をつないでくれている。

この銀杏並木が、母校の文武両道にわたる充実発展とともにいつまでも生々としてたくましく育っていくことを祈念して止まない。

(三十八回)

母校のPTA



鳥屋 昇

今春、私は高崎高等学校PTA会長に就任いたしました。「PTA会長」などといえ、何か改まって聞こえますが、私の場合は少しちがいます。高崎高等学校に学び、通称「タカタカ」を母校とする私にとって、今回の会長就任はかつて通学した学校に再入学したような感じがします。

ところで、私は会長就任に当たり、前任者（松本隆二氏48回卒）からの、「高高のPTAは出過ぎたことをしない」という不文律を確認いたしました。ちなみに、松本氏も就任の際前任者（藤田登氏49回卒）からこれを引き継いだとか聞いております。私はこのことばを、「学校教育への干渉と誤解されるようなことはしない」という意味に解釈しています。そのかわり学校の重大行事には、協力を惜しまないのが高高のPTAだといえます。事実、前会長時代には野球部の選抜甲子園大会出場の快挙があり、PTAは、募金その

他で積極的な協力活動をしております。さらに藤田会長時代の、母校創立八十周年記念事業募金など、いずれも高高PTAの性格を語るものといえます。つまり、分を知り、良識ある活動をするのが高高PTAの特色でもあります。

このような母校のPTA会長として、すでに半年が過ぎようとしています。春の総会では、今年も例年どおり、進路講演会を実施しました。演題は「共通三年目を終えて」、講師は旺文社の新井政義氏。進路に対する会員の関心は高く、七〇〇人近い会員が聞いてくれました。私は自分の在学時代を思い、隔世の感を禁じ得ませんでした。また、十月には、高高を会場にして西毛地区高校PTA指導者研修会を行いました。この研修会では、「進路指導」、「生徒指導」の二点を主に研究協議しました。高校生の交通事故防止対策への提案など、生々しい今日的な問題も出され、指導の困難さを痛感させられました。進路問題では、大学入試に対する親の認識不足、子ども力の過大評価、親子の話し合い不足など問題となりましたが、高校生になると、進路は子供まかせの傾向にあるようです。当日の議長は高女PTA会長の原浩一郎氏（56回卒）。この日は、高高の先輩である高等専修学校長さんも、数名参加されておりました。

私は今よき同窓生に囲まれ、母校のPTA会長をつとめております。無事大任の果たせるよういつそうのご支援をお願いいたします。

私の 回想記

その1

高崎中学の頃

五十嵐徹夫

私は大正九年に高崎中学に入学したから、今より六十余年前のことになる。現在の高崎一中の処にあった母校は、道路より公孫樹並木を百米位入って校門があり、周囲はカラタチの生垣で囲まれている。その内側に桜の大樹が適當の間隔に植えてあつて、入学式の頃は桜が満開で美麗であつた。

入学式は講堂で、エンピフクの校長にフロックコートに威厳を備えた先生が多数見えて、中学に入学出来たのが嬉しかった。伊藤校長は式等で長時間の訓話をされたが、「本校は国家の中堅人物を養成するのであるから、全生徒はその主旨を体得して行動されたい。」と再三訓されたのを覚えている。先生では、柴山（英語）、村上（国漢）、高松（漢文習字）、土橋

（地理）の諸先生は風格があり、中曾根（数学）、新井（博物）の両先生には兄貴の様な親しみを感じた。

当時の運動は、柔道と剣道が正課であつたから全員が励み、紅白選抜の勝抜試合も行なわれた。柔道では中島治平（二一回）、剣道では吉野庸三（二〇回）の両氏、またフットボールの安田さん（二二回）、テニスでは橋本虎之輔（二一回）小栗龍太郎（二二回）、間庭喜久警（二四回）の各氏が活躍した。野球は私が二年の時許されて校内で練習の上対校試合を行う様になった。好敵手前橋中学と時々試合をしたが、四年の時前中校庭での試合に多数の先生と生徒が歩いて応援に行つた。笠原君（二五回）が投手として活躍したが、試合は負けて帰つたと記憶している。

学期末の試験が終ると、学業成績が学年毎に控室に発表された。また、控室の整列は成績の良い順に並び、私は常に列の後方にいたが、まわりの人達は点数は低くても常識は豊かで融通性があつたから、愉快に交際していた。全生徒の中で秀才として光つて見えたのは、福田起夫（二二回）、小沢光太郎（二二回）、蠟山芳郎（二四回）、平形照男（二五回）の諸氏等数人であつたが、これらの人は概して一握りの人と交わる孤高に見えた。ユーモアある態度で親近感のあつた浜名一雄（二二回）、安田徳次郎（二二回）、山口薫（二四回）等教氏の間味ある人が私は好きであつた。

高崎中学の卒業生は現在、中央でも地方でも有力指導者が多数活躍しているの

は頼もしい限りである。また、海流利用や緑藻細胞内の蛋白質利用等、新資源の開発を若い人に期待するものである。（二四回）

高校六年の回想

田村 晃二

我々50期生は、第二次世界大戦が終盤を迎えた昭和20年4月に入学し、昭和26年春卒業するまでの6年間、同一校舎へ通い、厳しい戦時下の教育も体験し、また、終戦後の荒廃した社会にあつても新しい時代の到来を待ちわびながら、夢多き青春時代を語り合った因縁浅からぬ仲間達なのである。

戦時中は、農繁期の勤勞奉仕で近在の農家へ麦刈りや稲刈りなどに動員され、銀シャリの昼食にありついた楽しい？思い出や、在校時の空襲警報発令には命からがら観音山へ避難したことなど、今考えると悪夢としか言ひようのない時代であつた。

また、終戦後は空前の食糧難時代を迎え、昼食時まで待てずに先生の眼を盗んで、弁当を食ひ食べたことを憶えている。教科書なども満足な装丁のものはなく、分冊で配付されたものを順次使用するといった状況であつた。参考書は勿論、新しいものはなく、古本の中から関係のあ

同窓会だより

関西同窓会だより

関西地区には現在消息の判明している同窓生は十四回を筆頭に七十一回まで四十四名を数え、夫々専門分野で活躍しております。さて、本年度のハイライトと云えば何と云つても、母校の甲子園初出場でしょう。丁度昨年の今頃（十月）からその可能性がポチポチ噂に上つて参りました。そこで例年一月実施の同窓会を、出場校発表を待つて二月十七日に行いました。当日は母校より遠々、田端部長他二名の特別参加があり、意気大いに揚がりました。そして来るべきセンバツ大会に初出場する母校野球部に、物心両面より出来る限りの援助をする事と、当日応援のためたる同窓会旗を作る事を万場一致で採決しました。

文武両道の大旗をかかげて、大会に臨んだ母校の戦績は御承知の通りですが、破れても尚、正に堂々の戦い振りは高々の名を広く全国にとどろかせたことでしょう。開校以来同窓生一同が待ち望んだ悲願は、かくて達成されましたが、この快挙を突破口として今後再び三度甲子園にセルリアンブルーの旗がひるがえり、翠嶺影を三の応援歌が轟く日を、関西同窓生一同鶴首して待つております。

（福田一郎記・三二回）

高朋会だより

る事項を拾い出して、友人同志写しとつたりしたものだった。

しかし、このような苦難の連続ではあつたが、その中で新しい時代の先取りというか、進取の気性の芽生えも早く、県内の他高校に先駆けて生徒自治会を発足させたのが、我々同期とその前後の同窓達であつた。

当時の高々には、菱刈、大塚、布川といった血の気の多い新進気鋭の先生方がおられ、旧制一高の自治会組織をモデルとした生徒会組織を作るべくご指導を受けたものであつた。

発足当時の生徒会は、生徒自治委員会として、高い理想を掲げた自治会憲章を基盤とした新憲法同様の三権分立制度による自治組織となつていた。

この自治会活動の中で、特記すべきこととしては、一万メートル校内マラソンの復活と旧制中学時代に前中と行つていた定期戦を復活させたことで、それが現在も年中行事として行われているものである。

また、修学旅行の計画なども、自治会で選出した旅行委員により計画が樹てられ、実行に移されたことも当時としては他校に例のなかつたことと言える。

このような波乱に富んだ6年間の生活で培われた積極的なヤル気が50回生のパイタリテイーとして、本年の高々同窓会総会の幹事役として発揮され、また、地元各分野の中堅として活躍している活動力となつていふことと信じているものである。

(五〇回)

級友はいま

梅沢 徹

早いもので、卒業して十五年たちました。藤岡から通学していた私は、七時四分発の八高線に飛び乗り二十分位で高崎駅に到着、学校まで一年の時は徒歩で、二年からはクラブ活動の為に許可された自転車通学しました。石原の畔道を毎日毎日、いたち道の如く同じ道を通つた事がなつかしく思い出されます。

在学中、共に頑張つた水泳部の仲間達や八高線で通学した、なつかしい友人の事を記します。水泳部のキャプテンをしていた、秋池君は家業を継がれ、北関東一の寝具の製造問屋をしておられます。非常に、気さくで面倒みの良い人で、現在も何かと水泳部の後輩の世話をしてられています。二中から来た柳原君は、大を中退して、海上保安学校に入学し、各地を勤務した後、現在は北九州市で、海上保安学校の教官をしておられるが、いまだに独身である。新町から通学していたO君は建築会社へ行つていて、東北の医科に入った碁の好きなS君とは、その後会っていない。一年後輩の古茂田君は、清水先生もいらつしやる群馬スイミングスクールの主任コーチとして、力を発揮し、海なし県で優秀なスイマーを育てている。我々の頃は、やつと関東大

会の出場を得る位いのレベルであつたのが、現在は国体、インターハイの出場者を出しているわけで、現役の部員には敬意を表す次第です。

八高線を通つた仲間では数学部の部長をしていた神部君は家業の建築会社を継がれ、市の学校等の建築をはじめ、一般住宅にもその能力をいかんなく発揮し、また藤岡での各団体で若手リーダー格として活動している。東京三洋の研究室にいる岩本君は新製品作りに。埼玉から通学していた設楽君は、現在藤岡に住まれて、不動産鑑定士として忙しく動いている。私は縫製工場を継いで、女性にかこまれて楽しくやっています。

終戦後のベビーブームの時代に生まれ、我々は、長男が多く、また商業都市、高崎の土地柄か、二世経営者が多いのが特徴のようです。昨年初めて、同窓会に出席し、楽しい時間を過ごしました。当番の方に感謝すると共に、一年に一度の総会には、多数の同窓生が集まるよう組織を含め一考を願う次第であります。

(六五回)



県庁高朋会は、昭和三十八年十二月二十日に群馬県職員を中心にして結成された高朋会、高高出身者の同窓会である。

「高朋会」という名称の由来は、高崎の「高」と朋友の「朋」とつたもので、会員が相互に親睦を深め相携えて住みよい郷土「群馬」の建設のため尽くそうという、高崎健児の心意気を示したものである。

現在、会の顔である会長には、高橋邦雄スポーツ振興事業団理事長が、副会長には横山巖県教育長が就任しており、会員は二百有余名、会員の中には関口実企画部長、吉田康一郎農政部長、田島和夫秘書課長、飯塚俊彦人事委員会事務局局長をはじめ、多数の会員が課長等の要職を占め活躍している。

高朋会の活動は、年一回の総会を兼ね忘年会又は新年会を行つていて、ここ数年は八〇人、百人の出場者を見ており、特に本年二月十三日の新年会には八十人の会員が集まり、高橋邦雄会長の勲二等瑞宝章受章と母校野球部の宿願の甲子園選抜大会出場を祝い、その後の寄付集めには野球部OBだけでなく会員全員がファイバーし、会員外二十五人を含む二百二十九名と百%に近い会員から寄付を集めるとともに中には年度末の多用の時に、居ても立つてもいられず甲子園へ馳せ参じた会員も多数いた。

今年の春は、高朋会にとつて久方ぶりの朗報続きのよき春であつた。会員の中には卒業以来未だ母校を訪れていない者も多いので、時期をみて母校訪問を計画したいと思つている。

(高朋会幹事、清水)

大学生からの
たより

進化慣性の束縛

森 幸也

人類は、始源生物から進化して現在に到るまでに、さまざまな能力を獲得しました。それに伴って、いろいろな方向性をも得たようです。この方向性とは、ひとことでは「向上への志向性」です。この向上への志向性は、進化の途上で条件反射的に身につけ、いつの間にか本能のようになってしまったものといえます。気の遠くなるようなスケールの時間には得られた運動量は、進化の方向性に巨大な慣性を与えたのです。

現代の人類の営みの中で、時間のスケールがあまりに違うにもかかわらず、この志向性の発現をみることができ、す。向学心、競争意欲、自己顕示、優越感、虚栄心、文明化、人口増加、排他性、差別、などなど、人類の営みの根源的な性質は、すべてこの向上への志向性のベクトル、他より優れたいという本能的欲求の発露と考えられなくもありません。これらのことは、長い地球の歴史のうちの微小時間内のことにすぎません。いわば向上への志向性の微分形です。この微分形の中にも、前進しようとする意欲が窺われるのですから、この方向性の大き

さはどれだけのものなのでしょう。

この志向性がさまざまな形で、多くの場合、人類全体に不都合な形で表われてしまう原因は、自然界の無秩序化、エントロピーの増大にあるといえます。生物は、このエントロピー増大、即ちさまざまな不都合な方向性の出現を、淘汰等でおさえ、一見エントロピーが減少して進化向上してきました。しかしこの志向性があまりに強すぎ、過去において成功したようにはエントロピーの増大を制御できなくなっている、そんな状態が、現在の地球、人類の実状ではないかと思えます。

現在の泥沼にはまりこみつつある人類を存続させようとするならば、この巨大な慣性を持った志向性を弱めねばなりません。今までの生物が環境や他の生物と調和しながら進歩してこられたのですから、そのレベルまで志向性を弱めるのです。現在の人間の生物界における階梯の位置は変わりません。ただ、これから進歩していく速度を緩和すればいいのです。環境や他の生物と調和して生存している程度に。人類が生態系の一員として、エントロピーの増大を地球内で処理できる程度に。しかし、このことはたいへん難しく、不可能に近いことです。この志向性の慣性があまりに大きいものですから。そして、生物界の頂点に位置する人類は、当然この志向性を最も保持しているのですから。

地球における生物は、どうやら進化しようとする意欲が過ぎたようです。

(七九回)

本郷の日々

神宮威一郎

騒々しくて活気に満ちていた駒場での2年間をへて、本郷キャンパスへ移ってから初めての秋をむかえる。教養学部時代は山登りばかりしていたが、年末の試験や公務員試験をひかえ、気を引き締めねばならない時期になってしまった。

法学部のほとんどの講義は700人以上で収容できる大教室でおこなわれ、有名な教授の場合など他大学からもモグリ聴講生が大勢来て講演会の様相を呈す。自分から積極的に友人や教官と接触をもとうとしなければ、非常に孤独な所である。

僕の現在の生活の軸は次の3つである。第一は法律相談所というサークル。木曜日の市民を対象とする無料法律相談活動、五月祭での模擬裁判、夏休みの移動相談（今年は静岡・浜松へ2泊3日で行った）などの主要行事のほかには様々な企画があり、最近では名簿作成の雑用に追われている。第二は田中英夫教授の「日本における英米法の摂取」というゼミで、僕の担当は戦後改革期の刑事訴訟法制定過程であった。第三は駒場で同じクラスだった友人数人とつくった民法の勉強会である。外見だけは、我ながらなんとまあ立派な学生生活を送っているのだから、といった具合だが、内容の充実度は至って貧弱であって、あせりばかり覚えるこの頃である。

(七七回)

通信制
同窓会の発足

「群馬県立高崎高等学校通信制同窓会」創立総会が、八月三〇日、高崎神社新学生会館で開かれ、同会が発足しました。昭和二十三年新制高校発足と同時に出版した高崎通信制も、延一三〇名の卒業生を送り出し、ここに念願の同窓会の誕生を見るに至ったものです。

年齢も職業も多様な通信制の同窓生ゆえ、当面は会員相互の親睦を深め、母校との連絡を緊密にすることを活動の重点においています。会員諸兄弟の絶大なご援助をお願いします。なお、主な役員は次の諸氏です。（敬称略）

- 顧問 中沢誠一（校長） 今井要（通信制教頭） 原一雄（同窓会長）
- 会長 早乙女七五三男
- 副会長 桜井力 鷲尾好美 北村ヒデア
- 幹事長 尾張久雄

（校内幹事 島田寛治記）



第35回高々・前高定期戦

種目	水泳	野球	ラグビー	バスケット	バレー	柔道	サッカ	玉入れ	硬庭	駅伝	剣道	陸上	軟庭	卓球	弓道	綱引き	体操	小計	総計
一般対抗	6			9	6		6	0				4.5	9	3		3		46.5	高崎高校
部対抗		3			0	3		0		9		4.5	0	6		6		34.5	106.5
部対抗	6	0	6	6	6	6	6	6	6	0	6	6	6	0				60	前橋高校
部対抗	0	6	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	6				18	52.5



第35回 高々・前高定期戦

〔最近10年間の成績〕

回年	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
高々	×	○	○	○	×	○	×	○	○	×
前高	○	×	×	×	○	×	○	×	×	○

高々六勝四敗
通算 高々一七勝二三敗三分

図書館報・学校新聞から

現代高々生気質の一端

卒業生諸先輩と在校生のかけ橋となりますかどうか。まずは図書館報から。
 「やはり利用者は三年生が多い。同じ三年 してあせるなあ。夏休みいっぱい部活があるので少し負担に感じてしまう。」(55年7月末、夏休み当番一人言) 冷房つきの図書室も55年の冷夏には勝てず、一日平均利用者60名に終わったようです。
 「四月〜十二月個人別貸出図書数ベスト三、第一位56冊、二位54冊、三位31冊。一方、一冊も読んでいない者は全体の22%。」(55年) 「一日の読書時間、一時間以上12%、三十分位36%、なし50%」(55年一学期) 「好きな作家ベスト四、星新一、夏目漱石、北杜夫、芥川龍之介」(56年一学期)
 なお、県の読書感想文コンクールでは昨年は大江健三郎著「現代伝奇集」(一年生)、今年度は湯川秀樹著「創造的人間」(三年生)が県一位で全国大会に送られています。
 次に新聞部の手に成る学校新聞から。
 「現代の高々生は、下駄を履いてくる者が少なくなり、帽子もかぶってこなくなり……服装によるパンカラは決して良いというわけではないが、パンカラな心すなわち知的ツツパリを忘れてしまっているとすれば、これは非常に悲しいことではないか。」(56年4月)
 「我々が誇りとする『自由な校風』も長いことにはあるまい。我々が現状を改善しない限り、学校側が制約を強めてくることは明白である。……今まで本校が自由を保ってきたことの裏には、学校側の生徒に対する信頼と生徒の使命感とが均衡を保ってきたことがあるに相違ない。従ってこの均衡が崩れれば、自由も崩壊せざるを得ないのだ。」(55年12月)
 「親や先生達によく僕達のことを、恵まれて幸せだと言う。その通り僕等は、何かほしい物があれば手にすることが出来る。また、やりたい事もある程度できる。……何もしないでもいい、確かに事足りて地球は回っていく。そこで、妙にシラけた気分になって、無気力、無関心になってしまう。」(55年4月)
 「(アンケート結果から) 現代高校生は世界的視野をもち、意見をもっているがそれ以上のことはせず、エネルギー問題等に不安を感じながらも何とかなるであろうと、冷やかに受けとめ、個人的な欲求の充足を求めているということ、……小天才ばかりが輩出し、人物がでてこない。このような状況の中、日本の将来に、一抹の不安を感じる。」(55年5月)
 「多極化する国際社会と、高まる防衛論の中で、日本はいかなる役割を果たせるか。日本のもつ強大な経済力を、世界平和の維持のために役立たせる政策を展開することです。……しかし、経済力だけで世界平和が維持できるかといえは答は絶対ノーである。……八〇年代九〇年代を構成していく我々若年層は、現実の国際学識に通じ、自分自身の主張をしっかり持ち……新しい日本人になる必要があるのではないのでしょうか。」(56年4月)

運動部活動報告

野球

第53回選抜大会 3月30日 甲子園 1
回戦

ラグビー

全国大会県予選 11月15日 県営 優勝
北関東地区大会 11月28日 熊谷市 関
東・ミニ国体出場

バスケット

全国高校総体 8月2日 横浜市 2
回戦。関東・選抜地区・ミニ国体出場

バレーボール

関東大会 6月6・7日 川崎市 第5
位。県準優勝二回他

サッカー

第60回全国高校選手権大会 57年1月
東京都。関東大会出場 県優勝2回 準
優勝1回 他

陸上競技

全国高校総体 8月2日 横浜市 4
×400mR(石井・加藤・丸山・内田)
3, 22, 2予選3位 400mH(内田)
57, 0予選5位

関東大会出場 県大会上位入賞他

軟式庭球

全国高校総体 8月2日 宇都宮市
(個) 須藤・荒井組2回戦 田村・森岡
組1回戦。第36回国体 10月14日 長
浜市(個) 須藤・荒井組2回戦。関東大
会 団体および個人5組出場1 2回戦

県優勝(個・団) 準優勝(個・団) 他上
位数回

硬式庭球

全国高校総体 8月2日 千葉市 林
2回戦。全日本ジュニア 7月 東京都
林。第36回国体 10月11日 彦根市

林2回戦。関東地区優勝 関東大会 他
県優勝1回他

剣道

関東大会 6月20・21日 熊谷市 予戦
リーグ。県総体優勝他

柔道

関東大会 6月13・14日 横須賀市 2
回戦。県団体3位他

卓球

小野里杯 優勝 田中幸一(1年) 他

水泳

第36回国体 9月13日 滋賀 高橋直一
郎。関東大会出場 県1位他上位多数

登山

県高校総体出場
スキー
関東大会出場 県入賞

弓道(同)

県(個) 4位目崎 (個) 3位柳沢

サッカー部 全国大会出場決まる
1月5日(火)駒沢競技場
14時15分キックオフ
対 上野工(三重)



運動部長 中原射鹿止

学芸部の活動状況

高校生活の最も思い出となる生徒の部
活の場として、運動部に対して学芸部が
ある。同好会を含めて二五部の活動を簡
単に記してみる。郷土部。「実験考古学」
に取り組み。古代人が使用した道具を彼
らと同じように製作使用し、古代人の生
活知恵を探ろうというもの。五年度度真
木賞受賞。数学部。難解な問題に挑戦。電
卓ゲーム。数学パズルなど。弁論部。部
誌「セルリアン」第二三号発行。高女、

中央合同の弁論研究会開催。井上房一郎
氏の哲学堂講演会の手伝いなど。文芸部。
部誌「翠巒」四四号発行。他校文芸部と
の交流研修会。校内部員研究誌「風洞」
を部員に配布。歴史。部誌「母岩」二号
発行。歴史とは何か。何によって形成さ
れ又変化するかなど歴史の本質に挑戦。
将棋部。四九年。五二年。五五年県下団
体戦で優勝。部員によるトーナメントで
実践的な技術向上に努力。五五年度真木
賞受賞。化学部。有機化学の発光高分子
エステルなどの研究。音楽部。吹奏楽部
が昭和一五年グリークラブが二二年、マ
ンドリンオーケストラが三七年に創設。
OBの指導協力で、夏休中音楽センター
を中心に定期演奏会開催。生物部。「確
氷川鳥川における水昆の研究」で五六年
度読売学生科学賞で優秀賞を受賞。三年
間の成果実る。他に長野曜の細菌の研究
も三年目。地学部。五五年度「榛名火山

二つ岳の二重爆裂火口とその堆積物」を
出品。学生科学賞で県最優秀賞を受賞。
全国審査で二等に入選。五三年五五年真
木賞受賞。

その他英語部。演劇部。写真部。物理
部。美術部。放送部。新聞部。JRC。
落語部。映画部。が地味な格調の高い研
究をつづける。同好会では鉄研。鉄道を
中心にしたあらゆる部門の研究。古典研
究。読書会を継続し、現在「古事記」の
輪読会を続行中。その他聖書。ギター。
陶芸の各同好会がそれぞれユニークな研
究と勉強をつづけている。

学芸部長 田島 秀雄

甲子園出場を ふりかえって

野球部の第五十三回選抜高校野球大会
出場に際して、同窓会長さんはじめ同窓
の皆さんより寄せられた物心両面からの
熱烈なご後援に深く感謝し、心よりお礼
申し上げます。特に幾度となく甲子園の
空にこだました「翠巒」の大斉唱は、敗
色濃くともすれば憂色につつまれてしま
いそうな高高ベンチに活を入れてくれ、
大いに奮い立たせてくれました。これに
励まされて、選手たちは最後まで力一杯
のプレーをしてくれました。勝負は大敗
におわりましたが、多くの方々から選手
たちの真摯なプレーにお賞めをいただき
ました。これも皆さんの力強いご声援の
お蔭だと思います。本当にありがとうございます。

さて、初出場に加えて進学校というこ
ともあって、マスコミの取材攻勢には辟
易しました。しかし、その割には印象に
残る記事はありませんでした。ところが、
帰校後読んだ一九八一年四月四日付「統
一日報」に、「吃音の縁」というK氏の随
想が載っており、これが本校野球部の甲
子園出場にふれたものでびっくりしまし
た。そして、この随想が今回の甲子園出
場に関わる記事の中で最も心に残るもの
でした。

本校同窓生である筆者は、生来の吃音
と在日韓国人のため、高校時代の思い出
には暗い記憶がついてまわり、母校に対
し一種の疎外感を抱いていた。そのため
母校の甲子園出場にもさして興奮はおぼ
えなかった筆者は、敗戦の翌日の新聞記
事で母校野球部の主将が自分と同じ吃音
の悩みを持つことを知り、急に母校が身
近に感じられるようになる。そして、在
学中の暗い記憶という「狭い了簡」から、
母校の選手たちに無関心だった自分を恥
じ、(勝たせたかったなあ)と胸に呟き、
ああ、これが母校意識、愛校精神とい
うものかと、はじめて自分と母校の絆を自
覚する。

甲子園出場が、立場や考え方の違うさ
まざまな同窓生に、母校との絆を強めて
もらうのに役立てばいいなあと考えてい
ましたが、K氏の随想でそのことが証明
されているようです。

野球部長 田端 稜

最近の進学状況 について

秋に入ると例年のこと、進路部の身辺
が俄かに忙しくなってきた。数年前、国
公立大の入試改革が断行されて、全国一
斉の共通テストが施行されて以来、その
対応で出願、その他の準備が早まってい
る。入試に、これと言った決め手を欠い
たまま、より良き方法を模索してみても、
他方で新しい弊害を生むことにある。現
在の高校生は、情報氾濫の中で資料の取
集に奔走するが、高校生活の根幹である
知識、学力の充実、向上がとかく後回し
になっているのが実情であろう。大学へ

の進学希望率が上向きになった昭和三十
年台後半からは、本校は毎年殆んど全員
の進学希望が続いている。高校卒業時に
初志の達げられるのが約半数、残る半数
の潔し組と心ならず組が一、二年足踏み
することになる。その傾向は例年変わら
ない。さてこの三月の進学状況は別表
の通りである。国立関係は多少の変動
はあっても国立二〇〇名弱の線は確保し
ており、傾向として地元志向が強くなり
地元群馬大が増加している反面、北大、
関西以遠への希望が減少している。又私
立大関係では、それが国立大のすべり止
めの役に立たなくなっている。国立は現
役で、私立は浪人としめるのが実情であ
る。

進路部長 増村 博

進学状況(全日制) ()は現役

大学	年次	54年	55年	56年	大学	年次	54年	55年	56年
北 大	大	5(2)	6(1)	5(2)	高 経 大	大	26(10)	39(21)	33(16)
東 北 大	大	22(12)	23(13)	20(12)	早 大	大	72(31)	53(19)	65(16)
東 京 大	大	7(2)	8(5)	10(5)	慶 応 大	大	34(19)	27(9)	35(12)
一 橋 大	大	4(4)	3(1)	2(0)	中 央 大	大	45(10)	42(12)	56(16)
京 工 大	大	3(3)	4(2)	7(5)	明 治 大	大	60(13)	52(10)	53(14)
千 葉 大	大	14(10)	10(4)	7(4)	日 本 大	大	39(2)	23(4)	39(4)
京 都 大	大	3(2)	2(1)	8(5)	上 智 大	大	12(5)	9(3)	12(5)
新 潟 大	大	8(4)	19(8)	12(10)	法 政 大	大	33(4)	24(3)	27(3)
筑 波 大	大	4(4)	4(4)	6(5)	立 教 大	大	10(4)	11(2)	24(8)
金 沢 大	大	3(2)	2(0)	6(4)	東 京 電 機 大	大	11(3)	11(1)	10(1)
東 外 大	大	3(3)	6(3)	1(0)	東 京 理 工 大	大	47(10)	34(14)	41(14)
群 馬 大	大	58(41)	58(40)	60(38)	芝 浦 工 大	大	6(1)	6(0)	7(2)
横 濱 国 大	大	6(2)	6(2)	10(7)	成 務 大	大	13(3)	7(1)	7(2)
静 岡 国 大	大	3(3)	3(2)	0(0)	学 習 院 大	大	10(6)	9(1)	6(2)
山 梨 国 大	大	0(0)	0(0)	1(0)	青 山 学 院 大	大	25(11)	22(6)	25(12)
埼 玉 国 大	大	13(6)	5(3)	4(2)	武 蔵 大	大	7(1)	12(0)	2(0)
信 州 国 大	大	5(5)	6(3)	5(4)	同 志 社 大	大	7(3)	11(5)	3(1)
福 岡 国 大	大	1(1)	1(0)	2(2)	立 命 館 大	大	9(3)	9(0)	10(0)
					そ の 他		218(55)	230(52)	163(35)

種別合計(全日制)

大 学 別	54年	55年	56年
A 国 立	193(112)	197(102)	191(111)
B 公 立	37(16)	52(26)	43(20)
C 私 立	615(164)	518(119)	550(137)
A + B + C	845(292)	767(247)	784(268)
D 短大、各種校	9(5)	3(3)	8(7)
総 計(現役)	854(297)	770(250)	792(275)
卒業生数	405	403	402
現役生数	207	189	192
進学率(%)	51.2%	46.9%	48.0%

第八十回 高々同窓会 新年総会へのお誘い

当番幹事代表

持田 章

(五十二回)

前回の第七十九回総会より、二人で
も多くの会員の参加をという主旨で、
その運営が、各期別幹事の当番となり、
第五十期諸氏が、先陣を引き受けられ
て、成功裡に事を成就させました。

明治、大正、昭和三代にわたる同窓
の方々一堂に会し、それぞれの時代
を回顧しつつ、母校の発展を祈念する
この総会、その貴重さを考える時、私
達第五十一期の当番幹事は、自らにか
かる責任の重さを感じますが、また、
その重荷にたえて、任を全うしたいと、
意欲に燃えております。

私達は過去の総会運営、とくに、前
回を参考にしながら校内幹事の先生方
とも相談して、地味ではあってもより
効果的な総会を開きたいと準備を進め
ております。各期同窓生各位におかれ
まして、この点よろしくご理解くだ
され、ご協力、ご参加いただけるよう
お願い申し上げます。

とき 一月二十三日(土)午後二時
ところ 高崎市労働会館
会費 三千元

昭和55年度高々同窓会経常会計報告

(昭和55年1月~12月)

費目	収入の部		備考
	昭和55年予算	実収入	
前年度からの繰越金	292,443	292,443	
入会金	415,000	416,000	全日 406 通信10
維持会費	1,500,000	2,485,770	
利息	10,000	50,995	
合計	2,217,443	3,245,208	

昭和56年度高々同窓会経常会計予算案

(昭和56年1月~12月)

費目	収入の部		備考
	昭和56年度予算		
前年度からの繰越金	527,618		
入会金	830,000		全日 405 通信10
維持会費	2,000,000		
利息	20,000		
合計	3,377,618		

費目	支出の部		備考
	昭和55年予算	実支出	
会議費	110,000	88,050	總會
祝賀費	80,000	93,875	卒業証書筒
餞別費	110,000	78,000	転出職員への餞別
慶弔費	60,000	84,000	香典花輪
通信印刷費	100,000	302,050	80年史案内など
旅費	60,000	52,750	京浜同窓会出席
總會通信印刷費	700,000	610,550	總會通知等発送
同窓会報費	150,000	145,000	同窓会報印刷
事務費	550,000	510,115	人件費
雑費	50,000	1,500	謝礼
予備費	247,443	251,700	翠樹体育会補助
同窓会基金へ		500,000	
次年度への繰越		527,618	
合計	2,217,443	3,245,208	

費目	支出の部		備考	○増	△減
	昭和56年度予算				
会議費	110,000				
祝賀費	130,000			○	50,000
餞別費	150,000			○	40,000
慶弔費	100,000			○	40,000
通信印刷費	300,000			○	200,000
旅費	70,000			○	10,000
總會通信印刷費	1,000,000			○	300,000
同窓会報費	180,000			○	30,000
事務費	600,000			○	50,000
井上・真本・同窓会長賞費	100,000			○	100,000
雑費	50,000				
予備費	587,618			○	340,175
合計	3,377,618			○	1,160,175

昭和56年1月24日
高々同窓会校内幹事会計

佐野卓立 真砂芳夫 松本昭榮 茂木道弘

昭和55年度高々同窓会特別会計 (同窓会基金)

(昭和55年1月~12月)

収入の部		支出の部	
費目			
前年度からの繰越	2,466,563	なし	
利息	58,796		
昭和55年度経常会計より	500,000	残高合計 3,025,359	
合計	3,025,359		

(高崎信用金庫西支店、定期)

昭和55年度庶務報告

1月20日	常任理事会	高崎	高崎高校
1月26日	理事会及總會	高崎	地域医療センター
5月23日	京浜同窓会總會 及新入会員歓迎会	東京	日本海運クラブビル
10月25日	常任理事会	高崎	高崎高校

事務局だより

維持会費値上げ、納入のお願い

本会の運営について日頃御高配いただき有難く存じます。御承知のことと存じますが總會の決定により、五七年度から維持会費年額一口二千元以上となりました。本会運営のため、ぜひ御理解御協力の程お願いいたします。なお、納入には同封の振替用紙を御利用下さい。

会員名簿、改訂作業中

五二年度の改訂発行に続き、五八年四月発行をめざして改訂作業を続けていますが、後ほど御案内、照会がお手元に参りますが、よろしくお願いいたします。

図書館御寄贈へのお礼

56・2・3 三十回(六羊会)より五十万。現代日本文学大系九七巻、原色現代日本の美術十八巻等。

56・5・6 昭五会より二十万円。新実験化学講座三六冊等。

56・9・26 海老原英吉氏(三三三回)城山三郎全集十四冊。

御厚志に対し厚く御礼申し上げます。

「翠樹文庫」に御寄贈下さい

同窓生および職員の著作を一堂に集め末長く保存しようとの意図で、現在一八〇種一九五冊が図書室の特別書棚に収められています。御著作をお持ちの皆様

御寄贈をお待ちしております。

古い会報ありませんか

本会報も七号からは年一回定期発行で全会員に郵送してありますが、それ以前の一号から六号までがお手元にありませんか。コピーをとらせていただけませんか。学校の会報係まで御一報下さい。

編集後記

先輩諸先生の御努力を受継ぎ十五号発刊の運びとなりました。本部幹事会を中心とする数度の編集会議を経て、会員相互の交流を願う十頁に増えました。御多忙の中、原稿をお寄せいただいた皆様に深く感謝申し上げます。今後、同窓会のあり方や会報の編集等につき御意見御批判をお寄せいただければ幸いです。(本部幹事会)

高崎高校同窓会報
第十五号

発行日 昭和五六年十二月十五日
発行所 高崎高校同窓会

〒〇二七三〇〇七四
高崎市八千代町二一四一

編集 高崎高校同窓会本部幹事会
印刷 出版 あさ社

高崎市乗附町一八五四―五九
電話〇二七三〇二一六